

ワイン色の海を越えて —紀元前2千年紀の東地中海と東西文化交流への一考察—

周藤芳幸

Over the Wine-Dark Sea :

International Exchange in the Late Bronze Age East Mediterranean

Yoshiyuki SUTO

フィンリーの『古代経済』(Finley 1973)以来、初期の地中海世界における経済活動の性格をめぐる議論のなかでは、ミニマリスト(プリミティヴィスト)の立場が優勢だったといえる。しかし、近年の考古学的データの蓄積は、このような立場に再考を迫りつつある。本稿では、かかる学界状況を踏まえ、テーベの貴族墓の図像表現、沈船からの知見、交易の構造という三つの視角からこの時期の東地中海交易に考察を加えることにより、メソポタミアなどのオリエント世界とエーゲ海世界との文化交流の諸相を検討した。

キーワード：交易、東地中海、沈船、経済、ケフティウ

Due to the progress of the archaeological investigations in the Mediterranean area Moses Finley's once so influential view of a primitive economy (Finley 1973) has recently been challenged by arguments for the existence of varied commercial activities and long distance trades in Classical Antiquity. Despite the limited nature of the relevant data, this revaluation holds also for the East Mediterranean in the Late Bronze Age. While the depictions of the Aegean delegates on the Egyptian wall paintings, who may have been the Mycenaeans controlling the newly conquered land of Crete, seem to be the reflection of a relation based on a gift-exchange, the large amount of raw materials such as ox-hide copper ingots loaded on the Gelidonya and Uluburun wrecks strongly suggests the development of the highly complicated commercial relations between east and west in the East Mediterranean in the Late Bronze Age.

Key-words : trade, East Mediterranean, wreck, economy, Keftiu

はじめに

「中心と周辺—周辺から見たメソポタミア」という特集は、エーゲ海考古学に携わる者に対して、きわめて挑戦的なテーマを提起している。というのも、このようなテーマ設定自体が、オリエント世界を茫漠とした周辺に押しやることにより自らの中心性を確固たる前提としてきた古代ギリシア研究とエーゲ海考古学の伝統的な視角に、はっきりと再考を迫っているからである。もちろん、古代ギリシア研究の隅々に浸透しているヨーロッパ中心主義に対しては、すでにさまざまな形での批判が提示されてきている。古典古代文明のアフリカ起源説を主張するバーナル(M. Bernal)の『黒いアテナ』(Bernal 1991)は、そのもっとも先鋭なものと評されよう¹⁾。

実際、バーナルのような極論は措くとしても、通時的に見るならば、ギリシアとエーゲ海世界の発展がメソポタミアを中心とするオリエント世界の動きと不可分の関係に

あったことは、当然のこととみなされてきている。そもそもエーゲ海では、生業の基盤である農耕牧畜はレヴァントから完成された形で導入されたことが推測されており(Hansen 1991)、物質文化の面で明確に東方とは異なる特徴が現れるのは、ようやく紀元前3千年紀になってからのことには過ぎない。紀元前1千年紀に目を転じると、紀元前9世紀の初期に再開される東方との接触、そしてそれにともなう東方との関係のシンボリックな再構築がギリシア文明の形成にきわめて大きな役割を果たしていたことについては、近年モリスがさまざまな角度から論じている(Morris 2000)。これにつづく前古典期から古典期にかけての時期については、師尾晶子の研究が、ギリシアの諸ポリスと東方の大國アケメネス朝ペルシアとの文化交渉の歴史的意義を、その複雑さとともに明らかにしている(師尾 2000)。

しかし、エーゲ海とオリエント世界との関係が問題の焦点となるのは、何よりも紀元前2千年紀の場合である。と

いうのも、この時代のエーゲ海文明、とりわけその後半を担ったミケーネ文明の社会については、しばしばその「西アジア的」な性格が強調されてきたからである。ミケーネ文明の社会を理解するための手がかりを同時代のエジプト、シリア、小アジア、メソポタミアに求めようとするフィンリーの「西アジア社会モデル」(Finley 1957)は、別な機会に論じたように²⁾、ミケーネ文明と西アジア諸文明との関係に対する本質的な理解に由来するものではなく、ミケーネ文明とホメロスの叙事詩とのあいだに想定されてきた（そして、今日なお考古学者のあいだでは広く支持されつづけている）関連を断ち切ろうとする彼の特殊な歴史観を展開する過程で、いわばその副産物として提示されたものだった。しかし、当時まだ解読されて日の浅かった線文字B粘土板文書の内容が、それまでホメロス的社會に予期されていたものとはかなり異なっていたこともあって、フィンリーの「西アジア社会モデル」は、チャドウィックの「中世封建社会モデル」(Chadwick 1976)とともに、ミケーネ文明の社會を復元するためのモデルとして頻繁に参照されることになったのである。しかし、線文字B粘土板研究の萌芽期に提示されたこれら二つのモデルが、ミケーネ社會の復元にあたって必ずしも適切でなかったことは、ギャラティとパーキンソンによって批判されている通りである(Galaty and Parkinson 1999)。

紀元前2千年紀後半のエーゲ海世界とオリエント世界とのあいだに頻繁な文化交流があったことは、エーゲ海各地で出土する東方系の遺物（オリエンタリア）や、西アジアにおけるミケーネ土器の広範な分布状況からも明らかである。しかし、このことは、もちろん両者の社會の構造的な類似性をストレートに示唆するものではない。何よりも、この時代のエーゲ海とオリエント世界とでは、社會単位の規模があまりにも異なっている。たとえば、調査が進んでいるピュロスの場合には、その最盛期にあたるLHIIIでさえ、宮殿を核とする中心市の面積は約15ha、そこから管理されていた領域の面積は2000ha程度と試算されている(Bennet 1999)。これに対して、ウルクでは、王朝時代の開始段階（紀元前4千年紀末）すでにその中心市の面積は100haを上回り、紀元前3千年紀末のアッカド王朝時代の最大版図は50,000haに及んだと想定されているのである(Galaty and Parkinson 1999:3-4)。このように格段に規模の異なる社會を、時期的に並行し相互に交流があったという理由だけで同一のモデルによって理解しようとすることには、明らかに無理がある。

むしろ、現段階で必要とされているのは、紀元前2千年紀の東地中海を舞台とする東西文化交流の展開を、考古学的な証拠に即して再考することであろう。そこで、ここではメソポタミアを中心とするオリエント世界とエーゲ海と

のあいだの関係について、この二つの地域のあいだで展開された交易の性格をめぐる問題に焦点をしづらって検討を加え、紀元前2千年紀の東地中海に展開されたダイナミックな文化交流の一端に光をあてるとともに、それがエーゲ海世界に与えた影響を考察していきたい。

その際に議論の出発点となるのは、紀元前2千年紀の東地中海における文化交流の考古学的証拠、すなはちエーゲ海で出土するオリエンタリアや、西アジアで出土するミケーネ土器は、いったい誰によって、また、どのようにして運ばれ、それは同時代の社會のなかでどのような意義を持っていたのかという問題である。第二次大戦後まもなく公刊され、紀元前2千年紀の東地中海文化交流史研究の嚆矢となった重要な著作のなかで、カントール(H.J. Kantor)はこの問題に対して以下のように明快な結論を提示している。「MMIIの末以降、紀元前2千年紀の後半を通じて、エーゲ海とオリエントとの交流の仲介者という譽れを与えられる資格があったのは、ミケーネ文明下のギリシアの船乗り、商人、工人だけだった」(Kantor 1947:103)。この説は、確かに一般に流布していた「光は東方から(*ex Oriente lux*)」という偏った見方に是正を促した点で、当時においては画期的なものだった。しかし、近年の研究は、むしろこのカントールの説を批判する方向で展開している。おもな論点は三つある。第一に、オリエントに到来したエーゲ海世界の人々は、カントールが言うようにミケーネ文明の人々だったのか、それともミノア文明の人々だったのか。第二に、該期の東地中海交易においてイニシアティヴを握っていたのは、エーゲ海世界の人々だったのか、それともオリエントの人々だったのか。第三に、交易として一括される物資の動きは、いったいどのようなモデルに照らして理解されるべきか。以下では、これらの点について順次検討していく。

テーベ貴族墓の壁画

まず、第一の問題に関して議論の的となってきたのが、エジプトのテーベにある貴族墓の壁面装飾である(Wachsmann 1987)。テーベでは、ハトシェプスト女王からトトメス3世を経てアメンヘテプ2世の治世にいたる半世紀ほどの期間に活躍した5人の貴族の墓に、ファラオへの貢ぎ物を手にしたエーゲ海からの使節と考えられる人物像が描かれている³⁾。このうち、トトメス3世の治世後半からアメンヘテプ2世治世初期に活躍した宰相レクミラの墓では、彼らはケフティウと明記されており、他の墓の例もやはりケフティウを描いたものと考えてさしつかえないであろう。一般にクレタ島と考えられているケフティウについては、これをキプロス島に比定する説もあるとはいへ(Strange 1980)、少なくともこれらの壁画に描かれている人物がエー

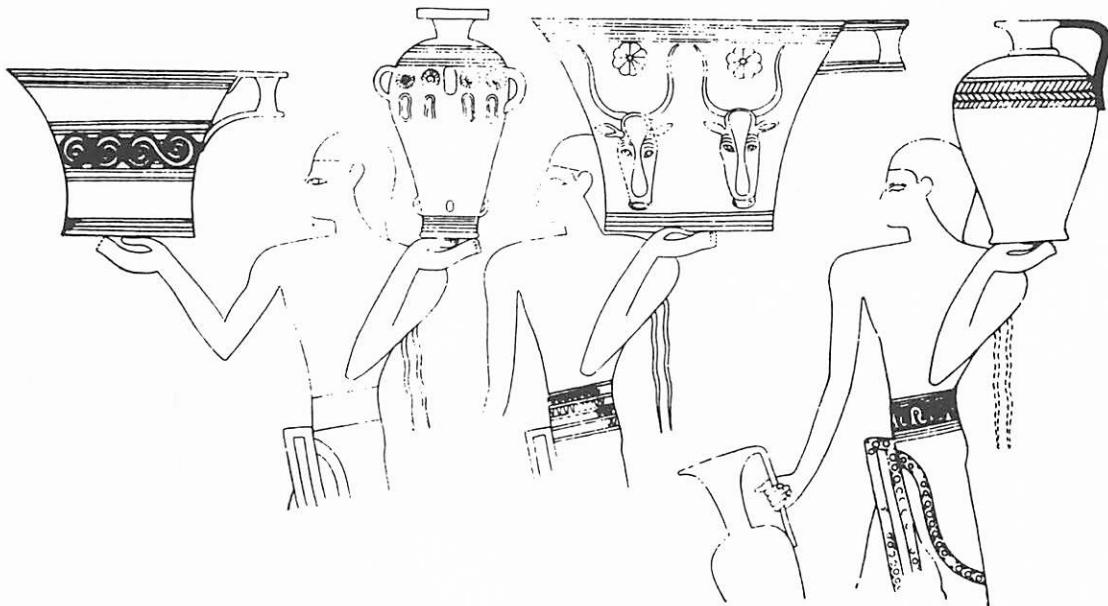


図1 セネンムトの墓 (T.71) に描かれたエーゲ海人 (Wachsmann 1987, Pl. 23, A)

ゲ海の文化圏に属していたことは、彼らの特徴的な衣装や、手にしている容器の器形からも疑いはない。

これらのケフティウたちのうち、相対的に古いセネンムト、アンテフ、ウセラムンの墓に描かれている者たちは、大きな前垂れを特徴とする様式化されたミノア文明の腰巻きをまとっている(図1)。これに対して、レクミラとメンケペレスネブの墓に描かれたケフティウは、腰にキルトを巻いている(図2)。ところが、早くから注目されてきているように(Strange 1980: 116-117; Wachsmann 1987: 44-45)、レクミラの墓のケフティウたちは、当初はセネンムトの墓の場合のようにミノア文明の腰巻きをまとった姿で描かれていたのが、ある時点での部分に白い上塗りが施され、そこにキルトが重ね描きされている(図3)。これは、いったい何を意味しているのであろうか。

通説は、これをクレタ島における支配者の交代、すなわちギリシア本土のミケーネ文明の人々によるクレタ島制圧という事件の反映と解釈してきた。すなわち、これまで朝貢してきたミノア文明の人々に代わって、キルトを巻いたミケーネ文明の人々が朝貢してきたことが、ここに表現されているのである。たしかに、リアク(P. Rehak)が明らかにしているように、エーゲ海側の考古学的証拠は、必ずしもこのような衣装の二分法を支持するものではない(Rehak 1998: 42)。腰巻きもキルトも、ミノア文明のクレタ島とキクラデス諸島では、それぞれ長い伝統を持っていったことが知られ、有名なアイア・トリアダ出土の「収穫の壺」のように、両者が同一のコンテクストで並存している例もある。しかし、それにもかかわらず、レクミラの墓において壁画の意図的な書き直しが行われたという事実

は、確かに記号化された衣装表現がエジプトでは何らかの特別な意味を持っていたことを示しているといえるだろう。問題は、その年代である。

エジプト側の年代には、さしあたり大きな支障はない。ワクスマン(S. Wachsmann)は、ヴェルクーテ(J. Vercouter)の研究に拠りながら、レクミラが伯父のウセラムンの跡を継いで宰相に就任したのがトトメス3世の治世第28年(紀元前1476年)であることから、オリジナルの壁画が描かれたのは紀元前1475-70年、書き直しは紀元前1470-1450年頃と推測している⁴。そして、この年代は、伝統的なエーゲ海の編年ではLMIBからLMIIへの移行期に相当し、まさにミケーネ文明によるクレタ島制圧に想定してきた年代に符合する。

ところが、エーゲ海側では、1990年代以降、サントリニ島の爆発を紀元前1628年におく高編年をとる立場が主流となりつつある。サントリニ島が爆発したのは、クレタ島の相対編年でいえば從来紀元前1500年頃におかれていたLMIA期の末にあたるので、クレタ島で諸宮殿が崩壊したLMIBからLMIIへの移行期の絶対年代も、新しい編年観のもとでは紀元前1500年くらいにまで上がることになる。言い換えれば、エーゲ海の人々がテーベの貴族墓に描かれる始める段階は、エーゲ海の土器フェイズではLM/LHIIA1に相当し、この時点ではすでにクレタ島はミケーネ文明のもとにおかれていたことになるのである。エーゲ海側の新しい編年観は必ずしも盤石なものではないが、少なくとも現段階では、レクミラの墓の人物像の書き直しをエーゲ海における勢力変化の直接の反映とみなすことは難しい。この問題をめぐっては、さらに編年研究の進展をまたなくて

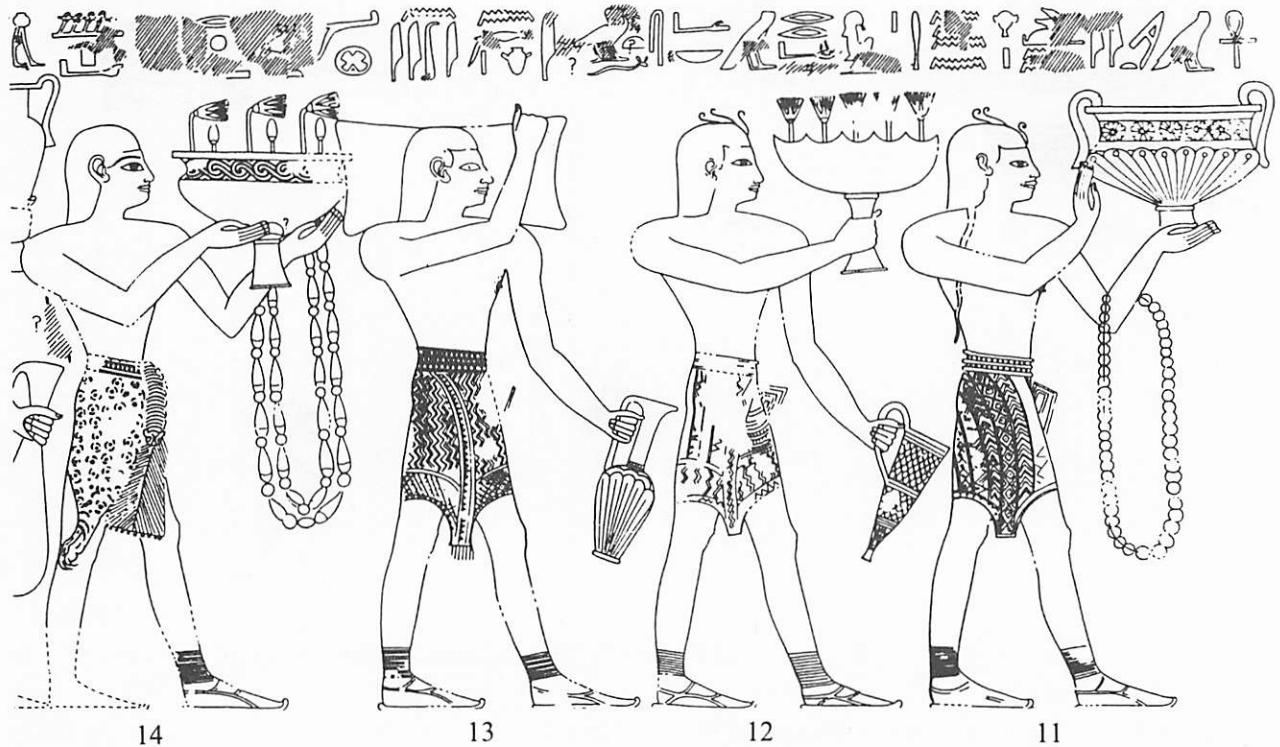


図2 レクミラの墓 (T.100) に描かれたエーゲ海人 (Wachsmann 1987, Pl. 43. A)

はならないであろう。不確定な要素を多分に残してはいるものの、現段階の知見によれば、「エーゲ海の人々の到来に関する最後の記録は自律的なミノア文明の終末と同時期のものであり、クレタ島統合後のミケーネ文明の人々がエジプトとの交渉を再興することはなかった」というワクスマンの説は、年代的根拠から否定せざるをえない⁵⁾。むしろ、エジプトとの交渉は、ミノア文明の要素を継承しながらクレタ島にクノッソスを中心とする新たな拠点を確立したミケーネ文明の人々の主導で展開されたと考えるべきであろう。

しかし、このような推論は、必ずしも東地中海の文化交渉を主体的に担っていたのが、カントールが示唆したようにミノア文明の人々ではなくギリシア本土のミケーネ文明の人々であったことを意味するものではない。むしろ、半世紀ほどでテーベの貴族墓の壁画からエーゲ海の人々が姿を消してしまうことは、このような交渉を支えていたのが、政治的にはミケーネ文明の勢力に服しながらも文化的には依然としてミノア文明の伝統を保持していたクレタ島の人々であったことを裏書きするもののように見える。ミケーネ時代（すなわち LMIB 末におけるミノア文明の諸宮殿崩壊後）のクレタ島の状況は、近年ようやく本格的な研究の対象とされるようになったばかりであるが⁶⁾、紀元前2千年紀後半における東地中海の文化交流の鍵を握っていたのは、この時代のクレタ人であった可能性が高い。



図3 レクミラの墓に見られる描き直し
(Strange 1980, Fig. 10)

このことは、つづく時代にアメンヘテプ3世葬祭殿（コム・エル・ヘタン）のいわゆる「エーゲ海リスト」に現れる地名のうち、確実に同定が可能なものがクレタ島に限られることとも符合する⁷⁾。アメンヘテプ3世のカルトゥーシュが入ったファイアンス板がギリシア本土のいくつかの遺跡から出土していることは、紀元前14世紀の前半にいたっても、なお何らかのエリート層相互の交流がギリシア本土の諸王国とエジプトとのあいだに存在したことを見ているが、大局的に見れば、線文字Bに海上交易への言及が乏しいことなども、時代とともにミケーネ文明の側では東方への関心が薄れていったことの傍証となるかもしれない。

テーベの貴族墓からの図像資料は、直接には交易にかかるものというより、むしろエリート間の贈与関係にかかるものであるが、そこから窺われる傾向は、該期の交易関係の全般的なあり方と無関係ではありえなかったであろう。しかし、東地中海の文化交流がミケーネ文明の勢力によるクレタ島制圧の直後に頂点に達し、その後は徐々に衰退に向かったのではないかという仮説を検証するためには、カントール説をめぐる第二の論点について、考察しておかなくてはならない。

沈船からの知見

紀元前2千年紀後半の東地中海交易においてイニシアティヴを握っていたのがギリシア本土のミケーネ文明の人々だったとするカントール以来の通説に対して、もっとも先鋭な批判を展開している研究者のひとりが、水中考古学者として知られるバス（G.F. Bass）である（Bass 1967, 1975, 1998）。難破して海底に沈んだ商船からは、当時の交易の実態について、壁画の描写や粘土板史料よりも直接的な情報を得ることができる。東地中海では、アナトリア南岸のゲリドニヤ岬とウルブルン岬、そしてアルゴス湾のイリア岬などの近海で、この時代の沈船が確認されているが、これらのうちゲリドニヤとウルブルンの調査を行ったバスは、沈船に積載されていた遺物の研究にもとづき、この時代の交易において主導権を握っていたのは、それまで考えられてきたようなエーゲ海の人々ではなく、オリエント、すなわちシリア・パレスティナ方面の人々であったという仮説を主張している。

バスがこのような仮説を着想する契機となったのは、1960年に行われたゲリドニヤ岬の沈船の調査だった。紀元前1200年頃に、アナトリアの南岸を西へ向かって航海していたこの船には、1トン近い銅の鋳塊、錫の鋳塊、青銅製品の鋳造にかかる道具類が積載されており、共伴する円筒印章やスカラベは、明らかにシリア・パレスティナ方面の人々がこの船に乗り組んでいたことを示していた⁸⁾。バ

スによれば、それまでは彼自身も後期青銅器時代の東地中海交易がミケーネ文明の人々によって独占されていたという伝統的な見解の影響下にあったが、円筒印章やスカラベの存在、そして何よりも天秤のおもりが西アジアの度量衡基準に従っていたことは、この説に疑いを抱かせるには十分だったという。しかし、問題の焦点となったのは、この船のもっとも重要な積載品、すなわち牛皮型鋳塊（oxhide ingot）の由来だった。

牛皮型鋳塊は、地中海ではサルディニア島、クレタ島、キプロス島などからおもに出土している四つ足の突出した扁平な銅のインゴットである（図4）。この特徴的な形態をもつ鋳塊は、上述したテーベのレクミラの墓の壁画にも描かれているため、しばしば「ケフティウの延べ板」（Keftiubarren）と呼ばれている（Buchholz 1959）。ミノス王による海上帝国の伝承が後ろ盾となっていたこともあり、近年にいたるまで、牛皮型鋳塊はクレタ島を中心とするエーゲ海の人々の手による交易品と考えられてきた。

しかし、ゲリドニヤ岬の沈船に積載されていた牛皮型鋳塊の起源を探るべくエジプト側資料を精査したバスは、牛皮型鋳塊を表現する16例の壁画および浮き彫りのうち、ケフティウによってそれらが運ばれているのは2例のみであり、さらにそのうちの1例にはその銅がレトゥヌ（シリア）で産出したとヒエログリフで明記されている（バス1977：82）ことを指摘した。こうしてバスは、牛皮型鋳塊もまた、ゲリドニヤの沈船がエーゲ海ではなくシリア・パレスティナの商船であったことを示す証拠となりうると論じたのである。

このようなバスの主張のうち、牛皮型鋳塊の起源についての説は、速やかに学界に認められるにいたった。たとえば、ワクスマンは、レクミラの墓におけるケフティウの朝貢図に現れる牛皮型鋳塊の表現を精査した結果（図5）、それがシリア人による朝貢図からコピーされたものである可能性を指摘した⁹⁾。さらに、ウガリットの南に位置するラス・イブン・ハニからこのタイプのインゴットの鋳型が出土したことは、実際にシリアで牛皮型鋳塊が生産されていたことを立証した（Lagarce et al. 1983）。たしかに、このような証拠は、他の地域でも牛皮型鋳塊が生産されていた可能性を排除するものではなく、事実、ゲリドニヤの牛皮型鋳塊の場合には、後に成分分析によってその生産地がキプロスであったことが明らかにされている（Gale 1991：228）。しかし、上述したように、ゲリドニヤの沈船は紀元前13世紀末のものであり¹⁰⁾、この知見は紀元前15世紀の壁画にもとづくインゴットの起源に関するバスの説と矛盾するものではない。

ところが、青銅器時代の東地中海交易におけるシリア・パレスティナの役割を重視するバスの説の主旨そのもの



図4 牛皮型鋳塊の分布図 (Gale 1981による)

は、なかなか学界に認められなかった。バスは、ゲリドニヤの報告書が学界から冷遇された状況を、バーナルの『黒いアテナ』のそれにたとえて憤りを隠さないが (Bass 1991: 77)、そこには古典考古学に底流する反セミティズム感情に加えて、水中考古学への偏見も作用していたことはおそらく間違いないであろう¹¹⁾。しかし、沈船からのデータの意義、そしてバスが提起した仮説の妥当性に学界の注目を向けさせることになったのが、ウルブルンの沈船の調査成果である。

紀元前14世紀末から13世紀初めのものと考えられているウルブルンの沈船は、トルコ南西部に位置する同名の岬(ウルブルンとは「大きな岬」の意)の東側海底で、1982年に発見された。1984～1885年にバスによって、その後は1994年までプラクによって行われた調査によれば、船荷の大部分を占めていたのは、約10トンの銅と1トンのほぼ純粋な錫だった。銅の大半は牛皮型鋳塊(354点)と円盤状鋳塊(130点以上)の形で積載されていたが、成分分析の結果は、それらがゲリドニヤとは異なる産地に由来することを示している(Gale 1991: 229)。しかし、さらに重要なのは、錫の牛皮型鋳塊である。というのも、青銅の材料としての錫の入手先は、エーゲ海考古学の最大の難問であるため、ウルブルンの沈船で最古の錫のインゴットが確認されたこと

の意義は大きい。錫の純度が高いことは鉛同位体分析を困難にしているが、原産地が東方であることに疑いはないであろう¹²⁾。

これらの金属鋳塊に加えて、ウルブルンの沈船からは、ピスタチオの樹脂やテレビン油を詰めた149点のカナン式アンフォラ、ガラスのインゴット、黒檀、杉、象牙などがみつかっている。それらは、この船が各地からの貴重な交易品を満載していたことを証拠立てているが、考古学的な観点から興味深いのは、いわゆるミルク・ポウルなどの特徴的なキプロス製の土器の数量である。というのも、キプロス島から大量のエーゲ海の土器が出土するのとは対照的に、逆の例はきわめて少なく、クラインによれば、エーゲ海側では後期青銅器時代を通じて確実なものとしては68点しかキプロス製の土器はみつかっていない(Cline 1994: 60)。ところが、ウルブルンの沈船からは、精製土器86点を含む計135点のキプロス製土器が発見されている。すなわち、プラクが指摘するように、ウルブルンの商船が無事にエーゲ海に到達していれば、この時代のエーゲ海とキプロスとのあいだの交易像は大きく変わっていたことが予想されるのである(Pulak 1987: 242-243)。なお、ウルブルンの沈船からはLHIIIA期のミケーネ土器やガラス製ペンドントなど、エーゲ海側の人々の搭乗を示唆する証拠もみ

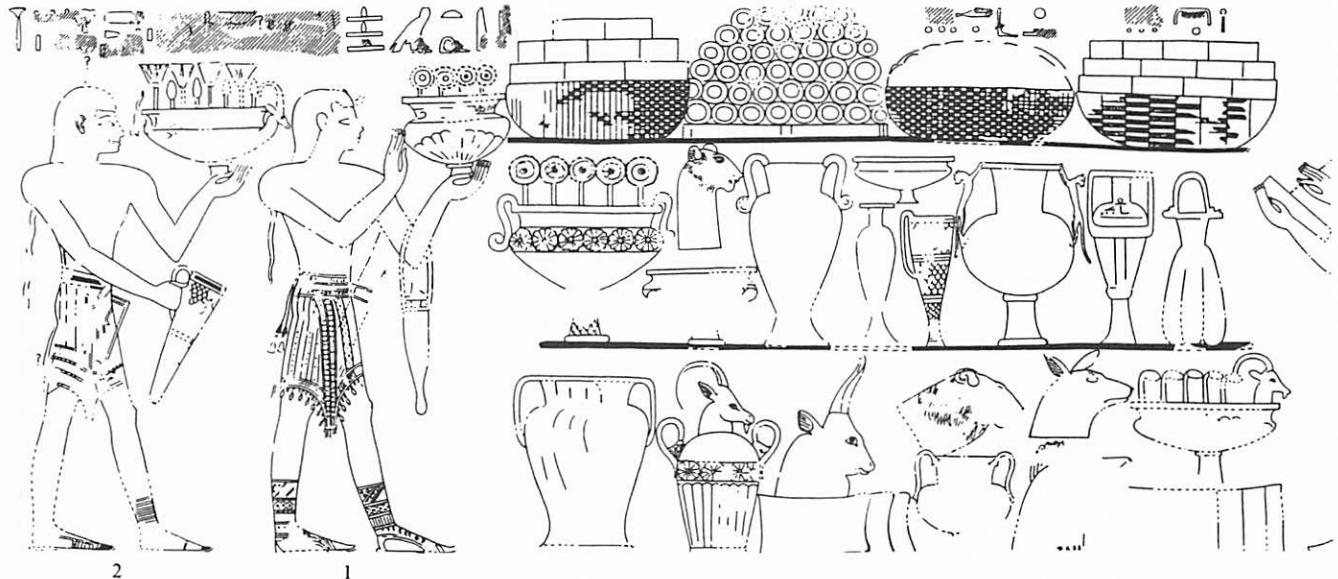


図5 レクミラの墓の貢納図 (Wachsmann 1987, Pl.41)

つかっているが、ランプや石製錨(24点が確認されている)の類例がすべてシリア・パレスティナ方面に求められるという事実は、この船の本拠地がこれらの地域にあったことを示唆している。東地中海における海流の方向を考慮すれば、この地域を航行している船が、その本拠地にかかわらずオリエントの物資を積載していることは当然ではあるが、これまで述べてきた状況からは、この船そのものが東方の人々によって操船されていた可能性が高い。

このように、ゲリドニヤとウルブルンからの知見は、後期青銅器時代の東地中海における遠距離交易の規模と性格に、根本的な再検討を迫っている。商船およびその乗組員の「国籍」をめぐっては、後述するようにそれを同定することの意義をも含めて依然として議論があるが、およそ1世紀を隔ててアナトリア南岸沖に沈んだ二隻の商船が、ともにシリア・パレスティナ方面を根拠地としていたことは揺るがせにできない事実であり、交易におけるエーゲ海側のイニシアティヴを一方的に強調してきた通説に再考を迫っているといえるであろう。

なお、バスの説が学界からネガティブに受けとめられた理由の一つは、彼が後期青銅器時代のシリア・パレスティナ方面の人々を「フェニキア人」と呼んでいたことにあつた(バス 1977: 83-85)。周知のように、フェニキア人とは紀元前1千年紀のレヴァントの人々に対する呼称であり、後期青銅器時代にこの呼称を用いることは、アナクロニズムにも見える。しかし、バスによれば、これは「計画的の犯罪」であり、その真の意図は、紀元前1千年紀のフェニキア人の活動が後期青銅器時代にまで連続的にたどることができるとともに、ホメロスの叙事詩に描かれるフェニキア商人の姿が後期青銅器時代というコンテクストにおいても妥当

することを示す点にあつた(Bass 1991: 70)。ここにいたって我々は、この問題の根がいわゆるホメロス的諸問題に通じていることを知るのであるが、残念ながらここではこの点に立ち入る余裕はない。

一方で、ゲリドニヤやウルブルンの沈船で際だっていたキプロスの重要性は、アルゴス湾のイリア岬沖で発見され、1991年から1994年にかけてギリシア海洋考古学研究所によって調査された沈船からのデータによって裏づけられている(Phelps et al. 1999; Vichos and Lolos 1997)。調査者は沈船の「国籍」については慎重にも判断を留保しているが、大型甕をはじめとするキプロス製土器の存在からは、この船がキプロスを出航した後にクレタ島を経由してペロポネソス半島東岸を北上し、アルゴス平野をめざしていたことが確実視されている。イリア岬の沈船は、LHIIIBの鐘壺から紀元前1200年頃のものと考えられており、正式の報告書が刊行される暁には、ほぼ同時期のゲリドニヤの沈船と並び、該期の東西交易の実態を窺わせる貴重な手がかりを与えることになろう。

交易の性格

考古学においては、物資の双向的な移動を伴う活動は、一般に交易(trade)、よりニュートラルな立場からは交換(exchange)と呼ばれている¹³⁾。しかし、どのようなタームを用いるにせよ、問題はその活動の実態であり、それを解明するためには、関連する考古学的証拠をいかなるモデルに照らして考えるかが重要な鍵となってくる。後期青銅器時代の東地中海交易をめぐっても、レンフルー以来さまざまなもの模型が提起されてきているが、その根底にあるのは交易の経済的な性格に関する議論である(Knapp and

Cherry 1994)。

古代経済の性格をめぐるプリミティヴィスト（あるいはミニマリスト）とモダニストとの見解の対立は、19世紀末から20世紀初めのドイツにおける有名なピューヒャー・マイヤー論争にまで遡る。それは20世紀後半にはフィンリーとロストフツェフによって各々引き継がれたが、フィンリーの圧倒的な影響力のもと、20世紀後半までにはプリミティヴィスト優位の状況が確立されるにいたった (Finley 1973)。しかし、考古学的調査の進展が非農業領域における経済活動の証拠を明るみに出すにつれて、現在ではモダニスト的な立場も勢いを盛り返しつつある (Mattingly and Salmon 2001)。後期青銅器時代の東地中海を舞台とする交易についての論争の経緯も、このような研究史の流れと無関係ではなく、贈与や互酬などの性格を重視するプリミティヴィストの立場と交易の商業的な側面を強調するモダニストの立場とが鋭く対立している¹⁴⁾。

プリミティヴィストの立場を継承するスノドグラスによれば、商業的な交易 (commercial trade) は、何よりも利益追求の場としての市場の存在を前提に成立している。すなわち、商業的な交易のもとでは、物資はあらかじめその目的（交換された後の移動先）が規定されない状態で、相互に同意された価値に従って交換されなくてはならない。このように定義するならば、先史時代のエーゲ海においては、二つの重要な物資の移動のメカニズムが、商業的な交易の範疇から抜け落ちることになる。それが、贈与交換 (gift-exchange) と再分配 (redistribution) である。そして、贈与交換が（ホメロスの叙事詩からの知見をどのように後期青銅器時代に外挿するかはさておき）社会的エリート間の互酬的な関係を担保し、市場経済ではなく再分配システムが該期の支配的な経済構造であったとするならば、少なくともエーゲ海側では商業的な交易が発展する契機は乏しかったと考えざるをえない。その証拠に、エーゲ海側では、オリエントに由来する装飾品などの遺物は、もっぱらエリートの墓から出土している (Snodgrass 1991)。これに対して、モダニストの側からは、物資の遠距離移動にかかる限られた考古学的証拠の背後には、そのような証拠を痕跡として残すことのなかった幅広い交易活動が存在した可能性が指摘されている。たとえばウイーナーは、紀元前11世紀中頃にエジプトから木材調達のためにビュプロスへ赴いたウェンアムンの旅行記を引きながら、そこに現れる交易品の多くが考古学的証拠として残らなかったであろうこと、とりわけ金属資源については、改鑄による再利用によって考古学的な証拠として残る可能性がきわめて低いことに注意を向けていている (Wiener 1991)。また、エーゲ海側の社会が再分配システムにもとづく首長制社会として理解されるべきことは確かだとしても、東地中海交易を問

題にする場合には、沈船から想定される交易ルートが規模においても階層性においても多様な社会の関与を示唆していることを軽視してはならないであろう。

しかし、さらに問題を複雑にしているのは、東地中海交易の主要な担い手に関する見解の不一致である。かつては、ミノス王による海上霸権の伝承 (Thuc. 1. 4) をうけつつ、宮殿などの支配政体による海上交易の管理は自明のこととされていた。プリミティヴィストの想定する贈与交換や再分配も、広い意味ではこちらの立場に含められるであろう。これに対して、メリエは上述した商船や乗組員の「国籍」を詮索することの意味に疑義を呈し、レンフルーのモデルに依拠しながら、フリーランスの商人こそが交易の主要な担い手であったことを主張している (Renfrew 1972: 470, Merrillees 1979: 24)。

いずれにしても、従来の研究において中心的な作業となっていた出土遺物の分布状況から交易のプロセスを復元しようとするときには、異なるプロセスが同一のパターンを生じさせるという困難な問題 (equifinality) を避けることはできない (Hodder and Orton 1976: 138)。したがって、上述した論点を踏まえて該期の東地中海交易の実態に迫るためにには、何よりもまず提示されているモデルの有効性を、ゲリドニヤやウルブルンの沈船からの知見によって検証する作業が必要となる。

ゲリドニヤの沈船については、調査者のバス自身によって、これがキプロスを含む広義のレヴァントからの私的な商人（あるいは遍歴する青銅冶金師）の交易船であることが繰り返し主張されている (Bass 1967, 1991)。このようなバスの判断の根拠の一つが、初期鉄器時代のフェニキア商人による交易形態からの類推にあることはもちろんである。メリエも、この船の「国籍」についてはバスと意見を異にしながらも、それが物資の交換によって利益を上げることのできる場所に寄港しながら移動していた独立の商人のものであったと考える (Merrillees 1979: 7-8)。イリア岬の沈船についても、同様の状況が想定されている (Vichos and Lolas 1997: 330-331)。

しかし、問題となるのはウルブルンの場合である。いうのも、遍歴するフリーランスの商人の船に、10トンの銅、1トンの錫をはじめとする高価で膨大な荷が船積みされるという状況は、いささか想定しにくいくらいである。実際、シリア・パレスティナ出身の個人商人の役割を重視するバスも、ウルブルンの沈船については王国の御用船であった可能性を認めており (Bass 1991: 76)、プラクにいたっては、これがアマルナ文書から窺うことができるようなオリエントの支配者とエジプト王室との間の公式の贈与交換に関わる船であったことを積極的に論じている (Pulak 1997: 256)。

しかし、ウルブルンの場合にも、錫のインゴットが元々の牛皮型からいくつに分割された状態で積み込まれていたことは、プラクによる否定にもかかわらず (Pulak 1997: 240)、それらが航海の途上で交易品として小出しに交換される予定であったことを示唆している。さらに、バスが指摘するように (Bass 1991: 76)、この船が難破した地点は、シリア・パレスティナからエジプトへ向かうルートからは西に外れている。オリエントとエジプトとの贈与交換にかかる船であったならば、このような迂回をする必要はなかったはずである。たしかに、東地中海の潮流を利用しながらロドス島からエジプトへ南下するルートも考えられるが、そのために海難の危険を冒してまで（実際にこの船は難破してしまったわけであるが）アナトリア南西部を西進する必要があったかは疑問であろう。むしろ、難破地点からは、この船がさらに西方をめざしていたことが推測されるのである。

それでは、ウルブルンの沈船の目的地は、どこだったのだろうか。もっとも有力な候補地は、バスが示唆するようにクレタ島のコモスであろう (Bass ibid.)。リビア海に面するメサラ平野西端に位置するコモスは、LMIB期までは主としてフェストス宮殿の、そして LMIII まではアイア・トリアダなどのメサラ平野の拠点集落の港湾都市として発展していた (Shaw and Shaw 1997)。ここでは、キプロスおよびシリア・パレスティナ方面からの土器が、現在までに知られているエーゲ海の他のどの遺跡よりも多く出土しており、コモスがエーゲ海における東方交易の玄関口であったことには疑いがない (Knapp and Cherry 1994: 138-141)。それは、フェニキア人が往来した初期鉄器時代の場合も同様だった（周藤 1997: 195-196）。

しかし、問題はクレタ島の側に、オリエントの支配者を相手どってこれだけの物資を贈与交換することのできる政体が存在していたかどうかである。ここで意味を持ってくるのが、紀元前14世紀末（樹輪年代で1305年頃）という沈船の年代である。エーゲ海側の高編年に従うならば、この時期のクレタ島は LMIIIA : 2 の末から LMIIIB の初めにあたる。クレタ島では、上述したように、ミケーネ文明の勢力による制圧の後、クノッソスによる一円的な支配のもとで東方との文化交渉が活発に展開されていた。しかし、この状態は長くはつづかず、LMIIIA : 2 段階に入るとハニアを筆頭に地域性が顕著になり、同時期のギリシア本土の場合と同じように、小規模な王国が並立していたことが推測されている (Haskell 1997: 188-189)。ウルブルンの船が沈んだのは、まさにそのようなプロセスが進行中のことであり、その時点では、新宮殿時代の繁栄の頂点 (LMIB) はもとより、ミケーネ勢力による復興もすでに過去のものとなっていた。このような状況下で、これだけの物資を介

したまったく非商業的な贈与交換が行われていたとは考えにくいではないだろうか。

調査された沈船は、この時期の東地中海で展開されていたさまざまなレヴェルにおける文化交流全体のコンテクストのなかでは、まさに氷山の一角に過ぎない。しかし、そこから浮かび上るのは、少なくとも後期青銅器時代の後半（紀元前14世紀後半～13世紀）には、必ずしもプリミティヴィストが想定するような贈与交換的な物資の移動だけではなく、後代のフェニキア人の活動から逆推すこと可能な商業的な交易活動が行われていた可能性である。もちろん、このような推測は、交易活動を保証するための海上の治安維持にかかるインフラ整備者としての宮殿の意義 (Wiener 1991: 333) を軽視するものではない。しかし、同時期のオリエントの支配者と一対一で贈与交換を行うような卓越した宮殿ではなく、複数の小規模な宮殿が互いに競合していたエーゲ海側の状況は、むしろ古典期のポリス世界の場合と同じように、この時期の東地中海に商業的な交易を促進する効果をもっていたと考えるべきであろう。

おわりに

これまで論じてきた点、およびここでは紙幅の関係で言及することのできなかった点も踏まえて、考古学的証拠から紀元前2千年紀における東地中海の文化交流の展開をまとめると、以下のようになる。

エーゲ海世界と西アジアとのあいだに最初の直接的な交流が認められるのは、紀元前17世紀後半から16世紀前半にかけての時期のことである。紀元前1628年に埋没したミノア文明の都市、サントリーニ島のアクロティリ遺跡では、「西の館」の壁をナイルの風景を描いたフレスコ画が飾っていた。ところが、近年これと対応するかのように、エジプトのテル・エル・ダバア（アヴァリス）で、「牛飛び」などのミノア文明のモティーフによるフレスコ画がヒュクソス後期の宮殿の壁を飾っていたことが明らかにされている（近藤 1997: 112-128）。アヴァリスのフレスコ画と共に通するミノア文明の技法と特徴を備えた壁画は、イスラエルのテル・カブリやシリアのアララクでも知られており、これらの壁画のエーゲ海的な様式しばしば「国際様式」と呼ばれている¹⁵⁾。アヴァリスの場合には、ミノア文明の王女がヒュクソスの王室に嫁いでいたという仮説が複数の研究者によって示唆されているが、その当否はさておき、このような資料がこの時期におけるエーゲ海とシリア・パレスティナ方面との密接な交流を物語っていることは確かである。

紀元前15世紀になると、エジプトのテーベの貴族墓の壁画に、ファラオに朝貢するエーゲ海人の姿が描かれるようになる。しかし、これは必ずしも、このような朝貢がこの

時期に始まったことを意味するものではないであろう。むしろ、彼ら自身の像やその貢ぎ物の表現が定型化を遂げていることは、そのイメージが既にクレタ島のミケーネ化(すなわち LMIB 末の諸宮殿の崩壊)以前に確立していたことを暗示している。このようなエーゲ海とエジプトとの交流は、紀元前14世紀になっても、アメンヘテプ3世の「エーゲ海リスト」によって裏づけられる。

しかし、興味深いことは、この頃からエジプトばかりではなく東方各地にミケーネ土器が大量にもたらされるようになったことである。ウルブルンの沈船などの証拠からは、これがかつて想定されていたようなミケーネ商人による東地中海交易の独占ではなく、むしろシリア・パレスティナ側のイニシアティヴによる商業的な交易の活発化の反映であることが推測される。小規模ながらも再分配システムにもとづく宮殿経済がミケーネ諸王国で成長するにつれて、銅などの鉱物資源の需要が高まり、それにおそらくシリア・パレスティナ側の人々が応じる過程で、かつての朝貢的な関係に代わるさまざまな規模の交易が活発化したのであろう。ピュロスでは、宮殿崩壊直前の段階で、400人にも及ぶ青銅鍛冶工の存在が知られているが、彼らが加工した青銅も、その原料は東方から運ばれてきたものだったに違いない。

このように、いわゆる「紀元前1200年の破局」によって東西交易が断絶するまで、紀元前2千年紀の東地中海では、さまざまな性格の交流がつづいていた。しかし、その交流が両地域の社会の均質化を促したかといえば、決してそのようなことはなかった。むしろ、「国際様式の時代」から「ケフティウの朝貢の時代」をへて「交易の時代」にいたるまで、交流はむしろ両地域の社会の異質さを同時代の人々に強く印象づけていったかのような観がある。古典期のギリシア人がフェニキア人を、ついでペルシア人を鏡として自らのアイデンティティを確立していくように、紀元前2千年紀のエーゲ海の人々も、ワイン色の海を越えて行われたエジプトやシリア・パレスティナの文化との交渉のなかから独自の文化を築いていったと考えられるのである。しかし、この点については、稿を改めて論じたい。

註

- 1) パーナルの『黒いアテナ』については、桜井1999を参照。パーナルよりもアカデミックなレヴェルでは、ブルケルトの東方化革命論(Burkert 1992)が、ポリス世界の興隆に果たしたフェニキア人の役割が反セミティズムによって軽視されてきたことを批判する。
- 2) 周藤芳幸「ミケーネ社会の経済構造」(2001年11月25日、西洋史研究会(青山学院大学)における口頭発表)
- 3) これらのファラオの正確な暦年については研究者のあいだでも異論があるが、ハトシェプスト女王の即位を1478年、アメンヘtep2世の即位を1427年とするキッテン(K.A. Kitchen)の説に

従う(Kitchen 2000: 44)。ちなみに、ヘイズ(W.C. Hayes)はこれより四半世紀ほど高い年代觀を、ヘルク(W.Helck)は逆に10年ほど低い年代を提示している(Rehak 1998: 41, n. 21)

- 4) ワクスマンらは高編年をとっているので、標準的なキッテンの編年では、それぞれ25年ずつ下がることになる。
- 5)もちろんここで問題となるのが、壁画に描かれているヴァフィオ杯などの年代である。ヴァフィオ杯はミケーネ文化圏では LHIIIA1になると器形のレパートリーから脱落する(Mountjoy 1986: 51)。しかし、テーベの貴族墓の壁画では、ヴァフィオ杯は人物像に比べてアンバランスに大きく表現されているため、画家は実際にヴァフィオ杯を見たわけではなく、見本帳のようなものを参照しながら描いていた可能性も指摘されている(Rehak 1998: 46)。
- 6) Driessens and Faoux 1997 所収の諸論文を参照
- 7) 周藤芳幸「エーゲ海世界とエジプト文明—Kom el-Hetanの「エーゲ海リスト」を中心に—」(早稲田大学エジプト学会第46回研究会における口頭発表)。「エーゲ海リスト」については、さしあたり Cline 1998 を参照。
- 8) バスは自著のプロローグで、この航海の様子を物語風に再現している(バス 1977)。
- 9) ワクスマンは、いずれの場合にも牛皮型鉄塊が供物の三段目、センターのやや左側に置かれている点に注意を促している(Wachsmann 1987: 50-51)。
- 10) カトリングらのようにゲリドニヤの沈船を紀元前12世紀まで下げる立場(Catling 1975: 215)は、明らかにこの時期の東地中海の状況に対する先入観を遺物の解釈よりも優先させようとするものである。
- 11) 水中考古学に対するその当時の古典考古学者たちの反感と偏見については、バス 1977: 179 を参照。
- 12) このことから、プラクは牛皮型という鉄塊の形態そのものについても、これが水上輸送のためというよりは、むしろ東方において隊商による陸上輸送に適した形態として発展した可能性を示唆している(Pulak 1997: 39-240)。
- 13) しかしレンフルーは先史時代の交易に関する有名な論文のなかで交易(trade)と交換(exchange)は同義語であると明言しており、実際にはこれらの語は少なくともエーゲ海考古学においては互換可能なものとして使われている(Renfrew 1975: 4)。
- 14) 古典期の場合と同様に、後期青銅器時代の場合にも、文字史料を重視する研究者がアーリティヴィストに、物質文化を重視する考古学者がモダニストになる傾向が見られることは興味深い。
- 15) 「国際様式」に関しては、アヴァリスのフレスコ画の年代も含めて論じるべき点が少なくないが、別の機会に譲りたい。さしあたり、Bietak 1995, Bietak and Marinatos 2000, Niemeier 1998などを参照。

参考文献

- Bass, G. F. 1967 *Cape Gelidonya: A Bronze Age Shipwreck*. Transactions of the American Philosophical Society, N.S. 57, part 8. Philadelphia, American Philosophical Society.
- Bass, G. F. 1975 *Archaeology Beneath the Sea*. New York, Walker (小江慶雄・小林茂訳 1977『海底の文化遺産—エーゲ海古代沈船発掘記—』時事通信社) .
- Bass, G. F. 1998 Sailing between the Aegean and the Orient in the Second Millennium BC. In Cline and H.-Cline 1998, 183-189.
- Bennet, J. 1999 The Expansion of a Mycenaean Palatial Center. In Galaty and Parkinson 1999, 9-18.

- Bernal, M. 1991 *Black Athena: The Afroasiatic Roots of Classical Civilization*. 2nd ed. London, Free Association Books.
- Betancourt, P. et al. (eds.) 1999 *Meletemata: Studies in Aegean Archaeology Presented to Malcolm H. Wiener as He Enters His 65th Year*. AEGAEUM 20. Eupen, Kliemo.
- Bietak, M. 1995 Connections Between Egypt and the Minoan World: New Result from Tell el-Dab'a/Avaris. In W. V. Davies and L. Schofield (eds.), *Egypt, the Aegean and the Levant: Interconnections in the Second Millennium BC*, 19–28. London, British Museum Press.
- Bietak, M. and N. Marinatos 2000 Avaris (Tell el-Dabca) and the Minoan World. In *Kaletsou 2000*, 40–44.
- Buchholz, H. G. 1959 Kefiubarren und Erzhandel im zweiten vorchristlichen Jahrtausend. *Prähistorische Zeitschrift* 37: 1–40.
- Burkert, W. 1992 *The Orientalizing Revolution: Near Eastern Influence on Greek Culture in the Early Archaic Age*. Cambridge Mass, Harvard University Press.
- Catling, H. W. 1975 Cyprus in the Late Bronze Age. In *Cambridge Ancient History II3*, 188–216.
- Cauvet, A. 1998 The International Style: A Point of View from the Levant and Syria. In Cline and H.-Cline 1998, 105–111.
- Chadwick, J. 1976 *The Mycenaean World*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Cherry, J. 1983 Evolution, Revolution, and the Origins of Complex Society in Minoan Crete. In O. Kryszkowska and L. Nixon (eds.), *Minoan Society*, 33–45. Bristol, Bristol Classical Press.
- Cline, E. H. 1987 Amenhotep III and the Aegean: A Reassessment of Egypto-Aegean Relations in the Fourteenth Century B.C.. *Orientalia* 56: 1–36.
- Cline, E. H. 1994 *Sailing the Wine-Dark Sea: International Trade and the Late Bronze Age Aegean*. BAR International Series 591. Oxford, Tempus Reparatum.
- Cline, E. H. 1998 Amenhotep III, the Aegean, and Anatolia. In D. O' Connor and E. H. Cline (eds.), *Amenhotep III: Perspectives on His Reign*, 236–250. Ann Arbor, The University of Michigan Press.
- Cline, E. H. and D. Harris-Cline (eds.) 1998 *The Aegean and the Orient in the Second Millennium: Proceedings of the 50th Anniversary Symposium Cincinnati, 18–20 April 1997*. AEGAEUM 18. Eupen, Kliemo.
- Driessen, J. and A. Farnoux (eds.) 1997 *La Crète Mycénienne: Actes de la table ronde internationale organisée par l'École française d'Athènes*. BCH Suppl. 30. Athènes, Ecole Française d'Athènes.
- Finley, M. 1957 The Mycenaean Tablets and Economic History. *Economic History Review* 10: 128–141.
- Finley, M. 1973 *The Ancient Economy*. London, Chatto and Windus.
- Foster, B. R. 1987 The Late Bronze Age Palace Economy: A View from the East. In Hagg and Marinatos 1984, 11–16.
- Galaty, M. L. and W. A. Parkinson (eds.) 1999 *Rethinking Mycenaean Palaces: New Interpretation of an Old Idea*. Los Angeles, The Costen Institute of Archaeology at UCLA.
- Gale, N. H. 1991 Copper Oxhide Ingots: Their Origin and Their Place in the Bronze Age Metal Trades in the Mediterranean. In Gale 1991, 197–239.
- Gale, N. H. (ed.) 1991 *Bronze Age Trade in the Mediterranean: Papers Presented to the Conference held at Rewley House*, Oxford, in December 1989. SIMA XC. Jonsered, Paul Astroms Forlag.
- Hagg, R and N. Marinatos (eds.) 1987 *The Function of Minoan Palaces: Proceedings of the Fourth International Symposium at the Swedish Institute in Athens, 10–16 June, 1984*, 11–16. Stockholm, Paul Astroms Förlag.
- Hankey, B. 1979 Crete, Cyprus and the South-Eastern Mediterranean, 1400–1200 B.C. In *Acts of the International Archaeological Symposium: The Relations Between Cyprus and Crete, ca.2000–500 B.C.*, 144–157. Nicosia, Department of Antiquities, Cyprus.
- Hansen, J. M. 1991 *The Paleoethnobotany of Franchthi Cave*. Bloomington and Indianapolis, Indiana University Press.
- Haskell, H. W. 1997 Mycenaeans at Knossos: Patterns in the Evidence. In Driessen and Farnoux 1997, 187–193.
- Heltzer, M. and E. Lipinski (eds.) 1988 *Society and Economy in the Eastern Mediterranean (c.1500–1000B.C.): Proceedings of the International Symposium held at the University of Haifa from the 28th of April to the 2nd of May 1985*. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Hiller, S. 1987 Palast und Tempel in Alten Orient und im minoischen Kreta. In Hägg and Marinatos 1987, 57–64.
- Hodder, I and C. Orton 1976 *Spatial Analysis in Archaeology*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Hood, S. 1999 Aspects of Minoan Chronology. In Betancourt et al. 1999, 381–386.
- Hood, S. 2000 Crete, Syria and Egypt. In A. Kaletsou 2000, 21–23.
- Kaletsou, A. (ed.) 2000 *Crete-Egypt*. Athens, Kapon Editions.
- Kantor, H. J. 1947 The Aegean and the Orient in the Second Millennium B.C.. *American Journal of Archaeology* 51: 3–103.
- Kitchen, K. A. 2000 Regnal and Genealogical Data of Ancient Egypt (Absolute Chronology I): The Historical Chronology of Ancient Egypt, A Current Assessment. In M. Bietak (ed.), *The Synchronisation of Civilisations in the Eastern Mediterranean in the Second Millennium B.C.*, 39–52. Wien, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Karageorghis, V. and N. Chr. Stampolidis (eds.) 1998 *Eastern Mediterranean: Cyprus-Dodecanese-Crete 16th–6th Cent. B.C.: Proceedings of the International Symposium Held at Rethymnon-Crete in May 1997*. Athens, The University of Crete and the A.G.Leventis Foundation.
- Knapp, A. B. and J. F. Cherry 1994 *Provenience Studies and Bronze Age Cyprus: Production, Exchange, and Politico-Economic Change*. Monographs in World Archaeology No.21. Madison, Prehistory Press.
- Koehl, R. B. 1995 The Nature of Minoan Kingship. In P. Rehak (ed.), *The Role of the Ruler in the Prehistoric Aegean: Proceedings of a Panel Discussion Presented at the Annual Meeting of the Archaeological Institute of America, New Orleans, Louisiana, 28 December 1992, with Addition*, 23–36. AEGAEUM 11. Eupen, Kliemo.
- Laffineur, R. and L. Basch (eds.) 1991 *Thalassa: L'Égée préhistorique et la mer, Actes de la troisième Rencontre égéenne internationale de l'Université de Liège, StaReSO, Calvi, Corse, 23–25 avril 1990*. AEGAEUM 7. Liège, Buteneers, s. p. r. l.
- Lagarce, J. E. et al. 1983 Les fouilles à Ras Ibn Hani en Syrie. In *Academies des Inscriptions et Belles Lettres, Comptes Rendus*,

- 249–290.
- Lambrou-Phillipson, C. 1990 *Hellenorientalia : The Near Eastern Presence in the Bronze Age Aegean, ca. 3000–1100 B.C. plus Orientalia: A Catalogue of Egyptian, Mesopotamian, Mitannian, Syro-Palestinian, Cypriot, and Asia Minor Objects from the Bronze Age Aegean*. Studies in Mediterranean Archaeology and Literature, Pocketbook 95. Goteborg, Paul. Aströms Forlag.
- Marazza, M. et al. (eds.) 1986 *Traffici Micenei nel Mediterraneo : Problemi storici e documentazione archeologica, Atti del Convegno di Palermo, 11–12 maggio e 3–6 dicembre*. Taranto, Istituto per la storia e l'archeologia della Magna Grecia.
- Marinatos, N. 1998 The Tell el-Dabca Paintings : A Study in Pictorial Tradition. *Egypt and Levant* 8 : 83–99.
- Mattingly, D. J. and J. Salmon (eds.) 2001 *Economies Beyond Agriculture in the Classical World*. London, Routledge.
- Merrillees, R. S. 1979 Cyprus, the Cyclades and Crete in the Early to Middle Bronze Ages. In *Acts of the International Archaeological Symposium: The Relations between Cyprus and Crete, ca. 2000–500 B.C.*, 8–40. Nicosia, Department of Antiquities.
- Mountjoy, P. 1986 *Mycenaean Decorated Pottery : A Guide to Identification*. Studies in Mediterranean Archaeology vol.73. Göteborg, Paul Astroms Förlag.
- Morris, I. 2000 *Archaeology as Cultural History : Words and Things in Iron Age Greece*. Oxford, Blackwell.
- Niemeier, W. 1991 Minoan Artisans Travelling the Overseas : The Alalakh Frescoes and the Painted Plaster Floor at Tel Kabri (Western Galilee). In Laffineur and Basch 1991, 189–201.
- Niemeier, W. 1998 The Minoans in the South-Eastern Aegean and in Cyprus. In Karageorghis and Stampolidis 1998, 29–45.
- Niemeier, W.-D. and B. Niemeier 1998 Minoan Frescoes in the Eastern Mediterranean. In Cline and H.-Cline 1998, 69–97.
- Palaima, T. G. 1991 Maritime Matters in the Linear B Tablets. In Raffineur and Basch 1991, 273–311.
- Phelps, W. et al. (eds.) 1999 *The Point Iria Wreck: Interconnections in the Mediterranean ca. 1200BC : Proceedings of the International Conference, Island of Spetses, 19 September 1998*. Athens, Hellenic Institute of Marine Archaeology.
- Pulak, C. 1997 The Uluburun Shipwreck. In Swiny et al. 1997, 233–262.
- Rehak, P. 1997 Interconnections between the Aegean and the Orient in the Second Millennium B.C.. *American Journal of Archaeology* 101 : 399–402.
- Rehak, P. 1998 Aegean Natives in the Theban Tomb Paintings : The Keftiu Revisited. In Cline and H.-Cline 1998, 39–50.
- Renfrew, C. 1972 *The Emergence of Civilization: The Cyclades and the Aegean in the Third Millennium B.C.*. London, Methuen.
- Renfrew, C. 1975 Trade as Action at a Distance: Questions of Integration and Communication. In J. A. Sabloff and C. C. Lamberg-Karlovsky (eds.), *Ancient Civilization and Trade*, 3–59. Albuquerque, University of New Mexico Press.
- Shaw, J. W. and M. C. Shaw 1997 “Mycenaean” Kommos. In Driessen and Farnoux 1997, 423–434.
- Snodgrass, A. M. 1991 Bronze Age Exchange: A Minimalist Position. In Gale 1991, 15–21.
- Strange, J. 1980 *Caphtor/Keftiu: A New Investigation*. Leiden, E. J. Brill.
- Swiny, S. et al. (eds.) 1997 *Res Maritimae: Cyprus and the Eastern Mediterranean from Prehistory to Late Antiquity*, 233–262. Atlanta, Scholars Press.
- Vichos, Y. and Y. Lolas 1997 The Cypro-Mycenaean Wreck at Point Iria in the Argolic Gulf: First Thoughts on the Origin and Nature of the Vessel. In Swiny et al. 1997, 321–337.
- Wachsmann, S. 1987 *Aegeans in the Theban Tombs*. Leuven, Uitgeverij Peeters.
- Watrous, L. V. 1987 The Role of the Near East in the Rise of the Cretan Palaces. In Hagg and Marinatos 1987, 65–70.
- Wiener, M. H. 1987 Trade and Rule in Palatial Crete. In Hägg and Marinatos 1987, 261–267.
- Wiener, M. H. 1991 The Nature and Control of Minoan Foreign Trade. In Gale 1991, 325–350.
- 近藤二郎 1997 『エジプトの考古学』「世界の考古学」4 同成社。
- 桜井万里子 1999 「古代ギリシア史研究の新しい潮流」『思想』901号、4–8頁 岩波書店。
- 周藤芳幸 1997 『ギリシアの考古学』「世界の考古学」3 同成社。
- 師尾晶子 2000 「ギリシア世界の展開と東方世界」歴史学研究会編『古代地中海世界の統一と変容』24–55頁 青木書店。

周藤芳幸
名古屋大学文学部
Yoshiyuki SUTO
University of Nagoya